忙殺

「おや、薬事全科の書き写しが全然進んでいないよ、リタ」

翌日の昼近くなって治療師は隣の村から帰って来た。薬草庫に入り、使い終わった薬草の小袋を桶に投げ込み、使わなかった小袋を棚に戻してから、テーブルの上の紙に目を落とした。

「そのことなのだけれど、治療師に聞きたいことがあって」

リタはもちろん怠けていた訳ではなく、分からないことがあって書き写しが出来なかったのだけれど、カラタ姉さんのところで一日中お話を聞いていたので、なんとなく後ろめたい気持ちがした。

「なんだい？　あー、その前に足を揉んでくれないかね。まったく、疲れてしまったよ」

リタは椅子に腰かけた治療師の前で、地面に膝をついて治療師の足を揉んだ。揉みながら質問を続ける。

「薬事全科の中にインクが滲んで元の字がどうしても読めないところがあるの。それってやっぱり、同じようにインクを滲ませて書き写した方

がいいの？」
「なにを言っているんだね。まったく、そんなことをしていたら、書き写しをする度にインクの滲んだところがどんどん増えてしまうじゃないか」
「そうおもったのだけれど、でもどうしても元の字が読めないのよ。じゃあ、そこだけ空けておいた方がいいのかしら」
「そんなの見ればわかるだろう。あー、こんどはこっちの足を揉んでおくれ。うん、うまいもんだ、気持ちいいね。とにかく、どの字が読めないのか、あとで見せておくれ」
リタは治療師が見たって読めない字は読めないと思ったのだけれど、何か秘密の方法があって、滲んだインクを元に戻すことが出来るのかも知れないと思った。
「歩いてお腹が空いたから、お昼は多めにしておくれ。そうだね、肉も食べたいね」
「それじゃあ、豚の塩漬け肉を炒めたのとパンとスープでいいかしら」
「ああ、カリカリに炒めてくれればね」
食事の後、治療師が薬事全科を見てみると、確

かに少しだけインクが滲んで文字が読めなくなっているところがあった。
「これはリーだね」
「どうしてわかるの？」
リタにはそれが不思議だった。もしかしたら見えるかも知れないと裏から覗いたり、斜めから見たりしても読めなかった文字が、上から普通に見ただけの治療師にどうしてわかるのだろうか。両目で見ないと見えない何かがあるのだろうか。
「だって、リタ。前後の意味から考えてここに来るのは「色」って言葉としか考えられないからだよ。滲んだ文字がリーだとすれば全部意味が繋がるじゃないか」
「意味？　そうよね、書いてあることには意味があるに違いないと思っていたのよ」
「ああ、そうか、おまえには文字を教えただけで、言葉は教えていなかったんだね。なあに、たいして難しくはないよ。だいたい普段使っている発音が文字になっているだけだから。まあ、治療に関する専門的な言葉も覚えなくちゃならないし、発音と文字の例外もあるが、たいしたことはないだろう。ちょうどいい、今からは書き

写しに知らない言葉が出てきたら、その意味を教えてあげようかね。意味が分からなければ文字が読めるとは言えないからね」

治療師はそう言ったが、リタはまだ全然書き言葉を知らなかったから、薬事全科にある一つめの言葉から全部教えてもらわなければならなかった。最初の文だけで十以上も言葉があり、二つめの文、三つめの文となってもどんどん新しい言葉が出てきて、すぐに覚えきれないほど大量の言葉を治療師から伝えられた。

その上、書かれている言葉は古い言葉ばかりで、ふだん聞いたことがないような言葉がたくさん出てくる。「根」を表す言葉だけでも「球根」と言ったり「塊根」と言ったりしてすごくわかりにくい。

そしてリタは、同じ言葉を何度も治療師に訊くのは迷惑だろうと思ったから、分からない言葉があっても前に出てきていないかと、これまで書き写したところを読み返して調べなければならなかった。その結果、書き写しはあまり進まなくなった。

リタは治療師に訊いてばかりいて書き写しが進まないので、少しいらいらし始めたが、治療

師は間違えずにしっかり書き写してくれれば遅くても構わないという。
それならとリタは薬事全科に書かれている内容も暗記しようとした。この書き写しが終ったら、もう薬事全科を見せてもらえないかもしれないのだ。治療師はなんとも言っていないが、薬事全科が大切な本であることは間違いない。この機会に暗記しておくしかないとリタは決意した。
決意はしたものの、知らない言葉の意味や、変な表記の仕方、古い言い回しなどが頭の中で一緒になって、もうどこにも薬事全科の内容を覚える余地はなかった。
夢の中でも言葉と文字が踊りだしてよく眠れず、食事の時にお母さんと話しても、つい古い言い回しが出て来そうになって、あわてて言葉を飲み込んだりした。
やはり文字と同じで、言葉とその綴りを一致させるには何度も書くしかないと思い、前に使った樫の棒を取り出して、空中に文字を書いて言葉の綴りを覚えた。
そんな夢うつつの日々がしばらく続くと、不思議なことに知らない言葉の出てくる割合が減ってきて、治療師に訊かなくても文章の意味がな

んとなく分かるようになった。その上更に不思議なことに、発音通りの綴りでなくてもなんとなくどう読むのか分かるようになった。

初めてみる言葉までが、治療師に訊く前からこんな意味だろうと見当が付くようになり、間違っていることもあったが、予想通りの意味のこともあった。

そこでようやく内容に気を配る余裕が出てきたが、最初のうちは聞いたこともない病気に、聞いたこともない薬草を使うようなことばかり書いてあって、あとでその病気に出会った時に役に立つかも知れないと思っても、やはり覚えにくかった。

その上、この病気にはこの薬草が効くと書いてある直後に、注釈がしてあり、いやこの薬草よりも別の薬草の方がよく効くなどと書いてあるので読んでいるだけでも混乱してしまう。

そこで治療師にこんな書き方をするのは紙の無駄ではないか、本当に効く方の薬草だけ書いておけばいいのにと言ってみた。すると治療師が答えて言うことには、後の薬草が見つからないこともあるだろう、その時は最初の薬草を使えばいいってことがわかるだろう、片方しか書

いてなかったらその薬草が見つからない時に困るだろうということだ。
薬事全科はこれまでの治療師の集めた知識のすべての記述なのだから、注釈を付け加えて行くことはあっても、前の文章を削ることは許されないと治療師は続けて言った。
書き写しばかりをしている訳ではなく、洗濯や食事の支度などもしなければならなかったから、リタは忙しかった。時折、手を休めて窓の外を見ていたりすると、それに気付いたのかクロが空から降りてきて、餌をねだったりした。

「さあ、リタ、ついておいで。奥の農家で子供が腹下したってよ」
治療師に呼ばれてリタは書き写しを止めて、治療師の鞄に薬草の小袋を一揃い入れて、それを持った。治療師の鞄は大きいので、小柄なリタが普通に下げて持つと底が地面を擦ってしまう。それでリタは胸の前に抱えるようにして鞄を持った。
「まったく子供はなんでも口に入れるからねえ。おおかた古くなったパンでも口にしたか、そうでなければその辺の草とか虫でも食べたのかねぇ。言うことは聞かないし、一日中見張っているわ

けにもいかないし、やっかいな代物だね」
「でも、かわいいわよ」
「若い娘はすぐこれだよ。どこがかわいいんだかねぇ。腹下しだよ、うんこまみれの汚い子に決まっているよ。まったく、治療師ったってうんこを拭き取ったり、ゲロの始末をしたり、そんな仕事ばかりだからね。ああ、今日はおまえがいたね。じゃあ、その辺はおまえに任せるとするか、どうだね」
「あら、赤ちゃんなんて病気じゃなくたっておもらしするわよ」
「だからあたしは赤ん坊も嫌いなんだよ。わけもなく泣くしね」
農家に着いて、腹を下した子供は一人ではなくてその家の子が三人とも腹を下していると聞くと、治療師は急にまじめな顔になって質問した。
「三人一斉に腹を下したのかい？　それとも順番にかい？」
農家のおかみさんが順番だというと更に質問を続ける。
「他に腹を下している人はいないかい？　大人でも子供でも、この家か近所か、遊びともだちの中に？」

この家にはいないが近所は分からないという答えを聞くと、治療師はリタに言いつけた。
「リタ、ちょっと近所を周って腹を下している人がいないか聞いてきておくれ。腹痛の薬を持ってきたから、いればついでに見てあげるとか言っておくんだよ」
リタが近所を聞いて周って、他に腹を下している人はいないようだとわかり、戻ってくると、おかみさんがお湯を沸かしていた。
「他にはいないみたいだわ」
「ああ、順番にと言っても半日のうちに続けてだから、何かが当ったんだね。三人一偏だから驚かされたよ。当る時はたいてい一人くらい平気な子がいるもんだがね。こら、おい、お前ら、何食ったんだい？」
「カエル」
一番上の子がつらそうにそう答える。
「生でかい？　何匹？」
「焼いて食ったよ。数え切れないくらいいっぱい。だって、うじゃうじゃいて、いくらでも捕まえられたから」
「生焼けがあったんだろうよ。三人だけかい、他に一緒にカエルを食ったやつはいないかね」

「いない」
「カエルは旨かったかい？」
「まあまあだな、塩があればよかった」
「はっ、懲りない子だね」
治療師は鍋の中に下痢止めの薬を三袋放りこんだ。すぐに薬の強い匂いがあたりに漂う。
「リタ、ちょっとこっちに来な」
治療師のそばにリタが行くと、一番下の子が使っていたオマルを指して、あの中を覗いてこいと言う。冗談を言っているようには見えなかったので、リタが中を見てくると、今度は家のトイレの中を見て来いというのでそっちも見てきた。
何が見えたか報告しなければならないのかと思っていると、それは言わなくてもいいという。治療師はどちらも既に見ていたのだ。リタに見るように言ったのは、だから、嫌なことを避けるためではなかった。
治療師は頃合いを見て、鍋の中の小袋を棒で引っかけて取り出し、そのまま器用に振って水気を切った。冷めるまで土間に置いておく。
「まあ、大したことはないね。この薬をよく冷まして飲ませるんだよ。それから食事は豆のお粥にでもするといいよ、今日だけでもね。食事

の度に薬を飲ませること、それから喉が渇いたといったら、水の代わりに薬を飲ませてもいいよ。もし、明日になっても、まだ腹が下るようなら、もう一度呼びに来ておくれ。まあ、たぶん、明日には治るね」

治療師が代金を受け取ると、リタは土間に置いてあった小袋を拾って自分の持つ籠の中に入れた。

帰り道、治療師は少し機嫌がよかった。

「はあ、驚かされたね。三人順番にっていうから、はやり病かと思ったよ。そうじゃなくてよかった。カエルなんか喰うかね。他に喰うものがないわけじゃないってのにねぇ。リタ、うんこは見たかい？」

「ええ、下っていたわ」

「それだけかい、もっと細かく見なきゃだめだよ。まあ、あれだよ、腹下りはとにかくうんこを見ないとね。本人の言うことより、よっぽどよくわかるからね」

それから治療師は便からわかる病気の見分け方をリタに教えた。リタは下痢便だけでも何種類もあるのに驚いた。

「まあ病気もいろいろあるが、腹下りはよくあ

る病気だね。リタ、おまえだって一度や二度は腹を下したことがあるだろうが。軽いものは放っておいても治るくらいだけれど、重いものは命にかかわるし、はやり病だったらほんとに大変だからね。まあ、とにかく軽いと思っても呼んでもらって、この目で見た方が安心するね」

リタは腹が下るのがそんなに大変な病気だとは思わなかったので詳しく聞きたいと思った。

「はやり病だったらどうなるの？」

「まあ、そりゃあ大変なことさ。特におまえはね。腹下りに限らず、はやり病が起ったら、治療師は手を出さない。見習いが全部やるんだ」

意外な答えにリタは驚いた。

「見習いが……？　どうして？」

「治療師にはやり病が移ったら、手のうちようがなくなるからだよ。はやり病の時に大切なことは、病人を助けることじゃない、まだ病気になっていない人を病気にしないことが第一なんだよ。特に治療師に病気が移らないように気をつけなければならない。だから、病人の手当ては全部見習いがやることになる。まあ、この場合たいていは見習いにも病気が移ってしまうね。死病なら見習いは失われる」

「あ……」
リタは口を開いたものの言葉が出て来なかった。そんなことは考えたこともなかった。しばらく黙って歩く。
「治療師も見習いも病人に近づくからね。はやり病にはかかりやすいんだよ。おまえが臭いっていうこんな服を着ているのも、病気が移らないようにするためだよ。だけど、本当に病気を防ぐには目も鼻も耳も口も手も足も全部被わないと駄目だと思うね。まあ、これでも少しは役に立つんだろうけど」
「見習いのいない治療師もいるわよね。見習いのいない治療師はどうするの？」
「近くに街があって、そこに見習いが何人もいるようなら応援を頼むことになっているが、まあ応援が来るかどうかは半々だね。誰も自分のところの見習いを失いたくないからね。街まで遠かったり、求めた応援が来なかった時は、はやり病が起ったことだけ組合に知らせて、治療師が手当てをするよ。その村は出入り禁止になるね」
「治療師も失われるのね」
「ああ、そこまで来ると村が全滅ということも

あるね。まあ、そう心配することはない、ひどいはやり病は百年に一遍くらいだからね」
「何か手だてはないの？」
「いや、はやり病でも早く見つかればね、病人を他の人から遠ざけて置けばね、まあ、その病人が助かるかどうかはわからないけれど、ひどいことにはならないね。そのためには、とにかく軽い病気だと思っても、治療師を呼んでもらわないとね。だから、ほら、支払い出来なくても治療師を呼んでいいことになっているだろう。なにも思いやりからだけじゃないんだよ。はやり病を出来るだけ早く見つけて手を打つためなんだよ」
「それだけ？」
「まあ、ここだけの話だけどね、本当は病人が死んだら焼くのが一番だね。治療師組合は、病人が死んだら焼くことにしようって一度は決めたんだがねえ。駄目だったねえ」
「死体を焼くの？」
「そうさ。あれはいつのことだったかねぇ。あたしが生まれるよりずっと前のことだがね……」
この国どころか、隣の国々も含む多くの国で、

ひどい病気がはやってね。それはもう大勢が死んだものだよ。子供や老人は最初に死んでしまってね、健康な大人も次々と病気になって行ったよ。

治療師は流行を止めようといろいろ手を尽くしたんだが、なかなか流行は止まなくてね、そして治療師も見習いも次々と死んで行ったものだね。

しかし、中にはあまり病人の出ない村もあってね。治療師組合ではそういう村はどこが違うのかって調べたんだよ。だけど、病気が流行っている時は、治療師も足りなかったし、十分な時間もなかったから何が違うのかはっきりしなかったんだね。

けれども、少しずつ流行が収まってくると、だんだんわかってきたんだよ。

一番病気が少なかったのは、この国の外れの村でね。そこにはずっと遠くの方から一族で流れてきた人たちが住んでいてね。その一族は死体を焼くという風習を持っていたんだね。死体を焼くと煙が出るだろう。そうやって、天に昇ると考えていたんだね。

炎が汚れを浄化するっていう言い伝えは、昔からこの国にもあったんだがね。しかし、肉親の

死体が目の前で焼けていくのを見るのはやはり耐えられないんだろうね。土に埋めたって、蛆やら何かに食われてしまうんだろうがね、その場合は見なくても済むからねえ。

まあとにかく他に手がないものだからね、治療師組合は、はやり病の死体は燃やして浄化するって決めたんだね。そして、この国だけじゃない、いくつもの国で組合が王様に掛け合ってね。まあ、それだって大変なことなんだが、なんとか了解を得たんだよ。燃え残りの骨や灰を墓地に埋めるってことでね。

その後、二、三度、はやり病があったんだがね。死体を燃やすという手が効いたのか、それとも大した病じゃなかったのか、それ程広がらずに済んだんだよ。

ところが、やつらが騒ぎ出してね。

やつら、以前からいたんだがね、少しずつ勢力を伸ばしていたんだね。最初は、害のない連中だと思っていたんだがね、まあなんていうか慈善家かね、飢えた人にパンを分け与えたりしてね。そりゃあ、結構なことだがね。

しかしまあ、本性を隠していたのか、それともやつらが変ってしまったのか、だんだん王様や

貴族に取り入るようになってね。それでもまだ慈善活動は止めなかったので、なかなか気付かなかったんだね。

でもそのうちそうさ、復活ってことを言い出してね。肉体はやがて復活するから死体を焼いてはいけないと来たもんだね。なあ、リタ、死んだ肉親に帰ってきて欲しいと思う気持ちは、そりゃあ、誰にだってあるだろうがね。でもね、土に埋めた死体が復活してきたら、蛆だらけじゃないのかね。恐ろしいもんだろうがね。

まあね、本当に復活するわけじゃないからね。構わないよ、死体を土に埋めたってね、普通に死んだ死体ならね。でも、やつらもう頑固っていうか、なんていうか、言い出したことを譲らないんだね。例外ってものを認めないんだよ。だから、土に埋めると言ったら、疫病で死んだ死体でもなんでもかんでも土に埋めるんだよ。

それもねえ、まだやつらの仲間だけなら、まあそれほど大した害はなかったんだろうが、そのやり方を押しつけるからね。まあひどいもんだね、いつのまにか死体を焼くことは禁止されてしまってね。

今度疫病が流行ったら怖いね。まったく恐ろし

いよ。

「ああ、長話をしてしまったね」

治療師は家に帰り着くと、椅子に深々と腰を下ろした。

リタは薬事全科の書き写しに戻った。

「今度お祭りがあるんだってね」

書き写しをしているリタに治療師が話しかけてくる。以前はとても話を聞く余裕はなかったが、この頃は話を聞きながらでも書き写しができるようになっていた。

「それで市が立つって言うじゃないか。あちこちから商人が来て露店を出したり、この村のものもお菓子を売る露店を出したりして、小銭を稼ぐというが、本当かね」

「そうなの、年に一度のことだからみんな楽しみにしているわ」

リタはペンを止めて返事をした。書きながら返事をするだけの余裕はない。

「それで思うんだが、うちらも露店を出そうかね」

「えっ。何を売るの？　お菓子なら、お母さんが焼くから、売れないと思うけど」

「お菓子じゃないよ。媚薬だね」

「薬を売るの？　治療師組合の秘密はどうなるの？」
「リタ、手が止っているよ。まあ、媚薬は薬といっても病気を治す薬じゃないからねぇ。それに夫婦の間によそのもんが入って、なにするってのも粋じゃないしね。それにまあ男にとってはあまり聞こえのいい話でもないからね。治療師を呼ぶというわけにもなかなかいかないんだね。そういう訳で、昔から媚薬は売ってもいいってことになっているんだよ。これは組合でもちゃんと認められたことなんだよ。そりゃあ、作り方は秘密だけれどね」
　治療師の話からは媚薬がどういう薬なのかまるでわからない。どうやらお話に登場するような恋の薬ではなさそうである。それでも男女のことに関係のある薬らしい。そんなことを考えているとまた書き写しの手が止ってしまう。
「それでだね、リタ。書き写しの手も止っていることだし、村を周って小瓶を集めて来てくれないかね。瓶ごと売るから、たくさんの小瓶が必要なんだよ。大きさはこのくらいのね」
　治療師が薬草庫から持ってきた瓶は握り拳の中に納まってしまうくらいの小さなものだった。

「ああ、それからね。媚薬のことは女たちのだけの秘密にしておくれ」
リタは薬事全科と書き写し中の紙を仕舞って、治療師から小瓶を預かるとそれを持ってまず自分の家に行った。あちこちの戸棚を探したけれど、そんなに小さな瓶は見つからなかった。
ごそごそやっていると母さんが鍛冶小屋から帰って来た。
「何をしているの、リタ」
「小瓶を探しているの。このくらいの大きさの」
「そんな小さな瓶はないわよ。何に使うのかしら」
「媚薬を入れて祭りで売るの」
「まあ、そう言えば、治療師組合はそんなことをやっていたわね。とにかくうちにはないわ。父さんには必要ないのよ」
それからリタは豚飼いの家に行った。豚飼いは独り身だから、媚薬の瓶は持っていないだろうと思ったけれど、親しい人の方が頼み事はしやすい。
「ああ、むかし街に出た時に、面白半分で買ったことがあるよ。まだ残っているけれど、もう古くて使えないだろう。瓶ごとあげるよ」
リタはますますわからなくなった。夫婦で使う

薬ではないのだろうか。どうして独り身の豚飼いが持っているのだろう。
それからリタはサラの家に行った。
「あたしじゃわからないわ。でも、香水の入っていた瓶があるわよ」
その瓶は治療師が渡した小瓶よりもふたまわりも大きかったが、リタはそれも貰っておくことにした。
「でも、素敵ね。媚薬だなんて。あたし絶対買うわよ」
サラは誤解しているような気がしたが、独り身の豚飼いが媚薬を買うならサラが買ってもおかしくはない。誤解しているのはリタかも知れない。
カラタ姉さんの家には小瓶が三つあった。媚薬が入っていたのかどうかはわからない。その他の村の家には小瓶はなかった。媚薬を知っている人もいれば、知らない人もいたが、祭りで治療師が売るというと、どのおかみさんも興味を示した。
瓶集めというよりは媚薬の宣伝をして歩いたようなものだ。
治療師が薬草庫を整理してみると、空き瓶や中

の薬が古くなっていた瓶など、小瓶が五つ見つかった。
「まあこんなもんかね。街に行けば売っているけれど、それだけ手間をかけても割りに合わないだろう。そのうちついでがあったら買っておこうかね」
リタは治療師の指示に従って小瓶を水で洗った。前の薬が残っていて媚薬と混ざると、効かなかったり、効きすぎたり、変な効き方をしたりするのでよく洗う必要があるという。
瓶が小さいとブラシも中に入らずに洗いにくい。水を入れて勢いよく振ってから水を出すということを繰り返して洗う。それでも、瓶の底にこびりついた塊はなかなか取れない。
仕方がないの水をいれたまましばらく置いておくことにする。その間に書き写しを進める。しばらく書き写しをして、肩が凝ってきた頃、また小瓶をすすいでみるが、一つの瓶だけは黒いかすが底についていてどうしても取れない。
そこでリタは治療師に相談した。治療師は瓶の中の匂いを嗅いでから、リタに瓶を返した。
「蒸留酒を瓶の口までいれて一日置いておき、それから洗ってごらん。もったいないけどね」

それからリタは治療師に連れられて、媚薬の材料になる薬草を採りに西の森に入った。豚の睾丸も媚薬の材料になるが、それは今回は使わないという。

森に入ると治療師は地面を探して歩いた。

「きのこだよ。小さな金色のきのこを探しておくれ。木陰に生えるんだけど、小さいからね。落ち葉に隠れるくらい小さいきのこだよ。あまり季節に関係なく生えているんだけどね」

なかなか見つからない。初めて薬草を探す時はこんなに見つからないものなのかとリタは思う。前に治療師に案内されて薬草を採った時はあちこち歩き回って大変だと思ったけれど、どこに生えているのかわからない薬草を探す方がずっと大変だ。

「あった、あった。これだよ、リタ」

治療師が指差すのは小指くらいの大きさの金色のきのこであった。本当に小さい。そしてきれいな金色をしているが、それは木陰で見た時で日の光に当てるとくすんだ黄色に見える。

「言っておくけどね、リタ。これは食べたら毒だよ。こんなに小さいきのこを食べようと思うものはいないだろうけどね」

「毒を媚薬に入れて大丈夫なの」
「なあに、量さえ少なければ大丈夫だよ。これだけじゃない、たいていの薬草は食べると毒になるからね。他に食べるものがなくなっても、薬草は食べるんじゃないよ」
　きのこは一度見つかると、その周りにたくさん生えているのがわかった。見つけ方を目が覚えるのだろうか。
「覚えておきなよ。このきのこの名前はカナビラだよ」
「ねえ、治療師。教えてほしいの。媚薬って、どういう薬なの」
「ああ、そうか。言ってなかったね。そうだね、こう言おうかね。男の体にはその人の思い通りにならないところがある。要らない時に張り切って、必要な時に働かない。それが思い通りにならないことは男にとっても具合が悪いし、女にとっても具合が悪い。媚薬はそれが必要な時に働くようにする薬だね」
「要らない時に張り切るのは治せないのね」
「ああ、本当に必要なのはその薬だが、そういう薬はまだ見つかっていないね」
「もしかして、去勢すればその薬の代わりにな

るんじゃないかしら」
「その通りだね。だけど、一度去勢してしまったら、どんな媚薬を使ってもそいつを働かせることはできないからね」
「よくわかったわ」
「それは結構なことだね」
小瓶ひとつにつきカナビラ一本でよいというので、すぐに採り終えた。もうひとつ薬草を使うというので、森の奥に入る。
膝くらいの丈の草がまとまって生えていた。治療師は一本引き抜いてリタに見せた。
「ネルガ。今回は媚薬に入れるけれど、これだけでカゼの薬にしてもいい。根を潰して使う」
そこで治療師はネルガを三本抜いた。それで薬草採りは終って二人は引き上げた。
カナビラを薬草庫のテーブルの上に並べておいて、リタは書き写しに戻った。やがて治療師の夕食を作り、その日のリタの仕事は終って、媚薬作りは翌日になった。

翌日、治療師の家に来てすぐにリタは蒸留酒を入れておいた瓶を見た。底に付いていた糟は取れたようである。蒸留酒を捨てて、水でよく洗

うと、すっかりきれいになった。これで小瓶が揃った。

薬の作り方を教えてもらうのは初めてである。小袋に薬草を入れたことはあるが、それは乾燥した薬草を何種類か袋に入れるだけで、薬を作るというようなものではなかった。

今度は本格的な薬の作り方である。治療師が指示してリタが実際の作業を行った。まず、ネルガの根をよく洗って重さを量る。

薬草庫には小さな天秤があった。行商人が使う天秤のおもちゃかと思うようなものだが、少ない量を正確に計ることができるという。そこに重りを乗せて重さを量る。

軽いものは重いものとは別の単位を用いるらしく、それは文字のゲーを使う。これは金を表すということで、金の量が重さの単位となっている。以前は同時にお金の単位でもあったという。

乾燥したものと取ってきたばかりのものでは重さが違うのだが、薬事全科にはちゃんと乾燥なら何ゲー、生なら何ゲーというように両方の重さが書いてあるから問題はない。

ネルガの根を二本で少し必要な量に足りなかったので、三本目を包丁で切ってつけ足した。計算

は治療師がしてくれたけれど、リタは治療師の仕事に算数がこんなに必要だとは思わなかった。これからは算数の勉強もしなければならないと思う。

量ったネルガを細かく刻んで、すり鉢に入れてよく潰す。ネルガから刺激的な匂いがしてきて目に染みる。しばらく潰していると、黄色い汁と繊維に分かれるので、汁だけ別の器に移す。残った繊維も布に入れて、更に汁を搾り出す。

「これも入れておこう」

治療師はお茶の葉をスプーンで計ってネルガの汁につけ足す。

「お茶だって、以前は媚薬だったんだよ」

治療師はそう言うが、リタにはちょっと信じられない。

「だって、みんな毎日飲んでるわよ。本当に媚薬だったら、きっと困ったことになってると思うわ」

「お茶を飲むとおしっこがしたくなるだろう。それが媚薬としての効果なんだよ。まあ、今の媚薬の方がそれよりは効くがね」

「場所は同じでもおしっこはたぶん違うと思うわ」

「男でもないのになんでわかるかね。まあ、媚

薬なんてものは気の持ちようだからね、効くと思えば効くものだよ」
　ネルガの汁にお茶の葉を入れた容器は蓋をして棚に置いた。それから、蒸留酒を瓶に注ぎ、その中にカナビラを入れる。
「本当は一年くらいこうやって蒸留酒に浸けておくのがいいんだが、三日も浸けておけばだいたい薬効はある」
　治療師はそう言ってからつけ足した。
「昔はこの媚薬だけで王侯貴族からたんまり金が貰えたものだがね。最近はもっと強力なのが出てきて、貴族の方々はもうみんなそっちばっかりだね。もっとも、強力過ぎて中には死んでしまう者もいるらしいがね。治療師はその媚薬からは手を引いたんだよ」
「治療師じゃなくて誰がその媚薬を作っているの？」
「錬金術師だね」
「聞いたことないわ」
「錬金術師は組合じゃなくて秘密結社を作っているからね。なかなか表には出て来ないんだよ。それに奴らは植物からではなくて、鉱物から薬を作るんだよ。そんなものが体にいいわけはな

いんだ」
カナビラを浸けておかなければならないので、媚薬の調合はそこで止った。それから治療師は棚を見てまわった。
「傷薬が少なくなっているようだね。ついでだから傷薬を作ろうか。夏になるとわけもなく走り回って転んだりする子が出てくるからね。祭りで酔って浮かれて喧嘩をする大人も出てくるだろうしね」
軟膏は豚の脂に化膿止めの薬草と痛み止めの薬草を混ぜて作る。軟膏の場合は乾燥した薬草をすり潰して粉にしたものを脂に混ぜるので、薬事全科には脂と薬草の重さの例が一つ載っているだけである。
今度は治療師がリタに比率の計算をさせた。薬事全科に載っている例の三倍の量の傷薬を作れというのだ。リタは少しあせってしまって計算を間違えそうになった。
「なあに、計算なんかしなくたって大丈夫だよ。三回ずつ量ればいいだけだろうが」
そう言われればその通りである。落ち着いたら、計算もすぐに出来た。計った薬草を小さいすり鉢ですり潰して粉にする。薬草はずっと前

から干してあったのでよく乾いていてすぐに粉になった。
それでも草の筋のところなどがまだ粉にならずに残っていたので、それを丁寧にすり潰していく。粉の部分はリタの息でも飛びそうなので、息を詰めてすり潰す。
すり潰した粉を豚の脂と混ぜる。これは全体によく混ざるようにしなければならない。そのためには、まず適当に混ぜておいて、それから脂を平らな板の上にヘラで薄く伸ばす。その時、薬草の粉の濃いところは色が違うので、そこを更に薄くなるように引き伸ばしていく。
引き伸ばしたら、今度はヘラで一ヶ所に集めて二、三度ひっくり返し、それからまた薄く引き伸ばす。それを何度も繰り返す。治療師はそこまで指示をしてから、薬草庫を出てしまった。
あとはリタの仕事である。ひたすら同じことを繰り返す。ペタ、スー、ペタという単調な音が響く。時々、ヘラについた脂をかき落として混ぜる。
単純な仕事だけれど、お父さんの鍛冶仕事にも似ているところがあるとリタは思う。きっとお針子の仕事にも似ているのだろう。薄暗い薬草

庫の中で、リタは単純な繰り返し作業を続けた。
単純な動作の繰り返しに、リタは眠っているような物語を聞いているようなうっとりと心地よい気分になってきた。夢とも空想ともつかない想いがリタの心を駆け巡る。
治療師になって毎日薬を作ったり、村を巡回したりして過ごすという空想。その空想の中でリタは重病人を助けたり、村を疫病から救ったり、新しい薬草を発見したりする。
更に空想はふくらむ。豚や羊や牛の病気を治療しているリタの元に、村の子供がどこかで拾った見慣れない動物の子を持ち込む。動物は傷つき飢えているが、リタの治療でやがて回復する。子どもたちとリタで育てたその動物はやがて大きくなると翼が生えてきてグリフォンとなる。
「もう出来たんじゃないかね」
治療師の声がリタの空想を破った。
いつの間にか治療師が薬草庫に戻って、リタの傍らに立って作業を見ていた。
「じゃあ、この瓶につめておくれ」
治療師の差し出した広口の瓶に、リタは軟膏をヘラですくって入れた。瓶の蓋を閉めて棚に置く。

「ところでリタ、さっきお腹のおっきいおかみさんを見たんだがね……」
「それはきっとアイラさんね。もうすぐ赤ちゃんが生まれるって聞いたわ」
「それで、この村には産婆さんはいるかね」
「いるわよ、カンナさん。それがどうかしたの？」
「いや、おまえに出産の見学をさせようと思ってね。その産婆さんはおまえを取り上げた産婆さんかい？」
「違うの。前の産婆さんは亡くなったのよ」
「カンナという産婆さんは見学させてくれそうかね。それにアイラという妊婦はどうだい。二人とも親しいかね」
そういわれるとちょっと首を傾げてしまう。嫌われているとは思わないが、これまであまりリタの家とは付き合いがなかった。
「あまり親しい方ではないかも知れないわ。お母さんに聞いてみないとわからないけれど。あ、そうだ。アイラさんところの旦那は気難しいって聞いたわ」
「それじゃ、またの機会にした方がいいかも知れないね。なに、治療師が産婆の代理をしなきゃならないことは滅多にないからね。無理に見学

を頼んで不愉快な思いをさせたら、今後の仕事がやりにくくなるからね」
「でも、治療師ってなんでもやるのね」
「まあ、それだけ世間の期待が大きいってことだね」
「見習いはいろいろ見学させてもらうのね」
「いや、ふつうは師匠の仕事を見るだけなんだよ。師匠のところに産婆の依頼がなければ、見習いはその技術を身につける機会はないね。あたしの師匠がそれじゃいけないってんで、必要なら人の仕事の見学もさせるようにしたんだよ」
「まあ、えらい師匠なのね」
「だけどね、治療師は自分のところの技術は秘密にしているからね。それでよその技術は見学させろっていうんで風当たりも強いんだよ。だから無理強いはしないようにね」
「あら、そうよね。じゃあ、よその仕事はしなくてもいいんじゃないかしら」
「そうもいかないんだよ」

リタはまた書き写しをしたり、治療師のあとについて歩き、病人や怪我人の治療の様子をみたりする日々に戻った。リタの作った傷薬が初め

て使われた時、作り方が悪いせいで効かないのではないかとリタは不安になったが、ちゃんと効いたようだ。

祭りが近づくにつれて、日が長くなっていく。村も祭りに向けて活気が増していき、サラも忙しいのか顔を見せない。マルカ母さんも堅焼き菓子をいくつもいくつも作っている。リタは治療師に聞いて「祭り」や「露店」など薬事全科に出て来ない言葉をいくつか習った。

そして祭りの前日、リタは治療師と媚薬の瓶詰め作業を行った。

ネルガの汁とお茶の葉を混ぜておいたものを布で漉す。それにカナビラを浸けておいた瓶から蒸留酒を注ぐ。よく混ぜてから、漏斗で小瓶に注いでいく。

一番難しいのは小瓶に注ぐところだった。薬の作成とは関係ないけれど、注意しないとあふれそうになる。それでも、小瓶は十本しかないからそれほど時間はかからなかった。サラの家の香水の瓶にも他の小瓶と同じくらいしか入れない。

「さて、これでよし。明日はあたしが媚薬を売るから、おまえは祭りを見物するなり、遊んでおいで」

「えっ。あたしも露店を手伝うわよ」
「こういうのはね、若い娘が売っていると買いにくいものなんだよ。それに数だってたいしてあるわけじゃないから、すぐに売れてしまうよ。そうしたら、あたしも祭りを見物するさ」
確かに十本ではすぐに売れてしまうだろう。そのうちの五本は借り物の瓶なのだから、すでに売約済みのようなものだ。
「そうそう、祭りで何かを買ったりするのにお金が要るだろう。お小遣いをあげよう」
リタは治療師が意外なことを言うので驚いてしばらく返答出来なかった。
「なにをぽかんとしているんだね。お小遣いがいらないのかい？」
「だって、あたし、見習いだし」
「だから、あたしが小遣いをあげるんじゃないか」
「どうして？」
リタにはどうして見習いが治療師から小遣いを貰うのか理解出来ない。見習いは治療師から教えてもらっている立場のはずである。
「おまえは家から通っているけれど、ふつうの見習いは住み込みなんだよ。親のない見習いだっているんだよ。そういう子は治療師から小遣い

を貰わなかったら、何も買えないだろうが。第一、お前はいつも食事やら洗濯やら、あたしの身の回りの世話をしているじゃないか」
「じゃあ、治療師と見習いは親子みたいなものなの？」
「何言ってるんだい、師弟だろうがね」
「じゃあ、もらうわ」
リタはそう言ったが、治療師から渡されたお金を見て驚いた。治療師はお小遣いと言っていたが、リタが見習いになって以来の賃金という意味合いもあったのである。